

五家荘の2つの宝！

ある日、五家荘に「鬼山御前」というとても賢くてきれいな最高の女性がいるという噂を画家の義高が聞きつけました。そのとき直接お会いして是非ともそのお姿を書いてみたいという強い思いが沸きだしたのです。義高は、居ても立っても居られず噂を聞いた次の日には鬼山御前が岩奥地区から移り住んだ保口地区にすぐ出向きました。義高は、鬼山御前を見るなり、その美しさに圧倒され言葉も出ないほどでした。「あなた様のお姿をぜひ書かせてもらえないでしょうか。」とお願いをするものの、中々いい返事がもらえません。何度も何度も、何度も何度もお願いしたところ、とうとう鬼山御前も義高の熱意に負けて「官女の十二単」の姿3枚だけという約束で書かせることをやっと許してもらえたのでした。義高が食事をするのを忘れるくらい一生懸命に書いた絵は、それはそれは素晴らしいものでした。義高は、できあがったその3枚の掛け軸のうち1枚を鬼山御前の父と母が眠る日向に、1枚を京都に、そして残り1枚を鬼山御前にプレゼントしました。鬼山御前にプレゼントされた絵は、子どもから孫へと先祖代々、那須家で宝物として大切に保管されたのです。ところが、いつの間にか、その宝物がどこに行ったのかさえ分からなくなってしまったというのです。村の人たちの話によれば、大昔、五家荘一体でもヒエやアワなど人が食べる作物が殆ど取れない大飢饉があったそうです。その時、鬼山御前の絵がある那須家でも食べる物が殆ど無くなったため、ヒエ2斗と鬼山御前の絵を交換したという噂を聞いたそうです。鬼山御前の絵をいったい誰と交換したのか、全く分からないまま時はどんどん過ぎてしまいました。ところが昭和34年の夏に突然、五木村の田村さんの家にあることが分かったのです。田村さんは、鬼山御前の絵とは全く知らずに、先祖から引き継いだ掛け軸を毎年3月3日のひな祭りの日に床の間に掛けて、家族みんなで眺めていたそうです。

そんなある日、全国66カ所を歩いて修行するお坊さんが田村さんの家に「今晚だけ泊めてもらえないでしょうか」と訪ねてきました。人の良い田村さんは快く家に招き入れたのです。そのお坊さんは家の中に入るなり、ふと床の間の掛け軸に目を向けると目を輝かせ「お宅には大した掛け軸をお持ちですね、この絵は、日本に3つしかないといわれる逸品ですよ。大切に保管された方がいいですね。」と行って次の日には修行のため、その場を立ち去っていきました。自分の持っている掛け軸が大変な価値があると言われた田村さんは驚いて、それから後はとても大切に保管しました。

一方、鬼山御前が住んでいた保口地域にも、そのお坊さんが修行の途中に立ち寄りしました。そのとき「ここのお宮に関係のある掛け軸を五木村で見ましたよ。」と言い残して立ち去ったのです。地域の人たちは、あきらめかけていた鬼山御前の掛け軸が五木村にあることを始めて知った感動で浮き足立ち、いま持っている人の名前

を聞き忘れてしまうほどでした。村人は、そのことを後になって気づき、後悔したのでした。それからしばらく時がたったころ保口地域の人が五木村の病院に入院した時、その掛け軸が田村さんの家にあるという情報を偶然にも聞きつけたのです。保口地域の人々は、日本に3つしかない鬼山御前の肖像画ということはみんなが知っていましたので、早速会議を開いて相談しました。保口地域の代表が田村さんの家に出向いて譲ってくれるように頼みに行きましたが、「何度来られてもお断りします。」と言われるばかりでした。しかし保口地域の代表は、断られても断られても、またお願いに行こうという強い思いが何故か不思議と沸いてくるのを感じていました。そこで何とか譲ってもらえるように、いろんな人に協力をお願いした結果、ついに保口地域に百数十年ぶりに鬼山御前の肖像画が帰ってくる事ができたのです。保口の人たちも始めて鬼山御前の絵姿を見て、自分たちの祖先が帰ってきたという喜びがふつふつと沸き、中には涙をこぼす人がいたほどでした。さっそくお祝い会が開かれ、地域みんな喜びました。今でも鬼山御前の肖像画は大切に大切に守られています。

さて、じつは保口地域には、もう一つの宝物があったそうです。みなさんは、いったい何だと思えますか？四国の屋島での戦いで那須与一が平家軍の舟の上の扇を打ち落とした、あの赤塗りの弓を那須与一の子どもである宗治が平家の落人を討つために保口地域に持ってきていたのです。その弓は、竹を5枚合わせた赤塗りの弓で、普通の人では2人でないと引けないほどの硬くて強い弓だったそうですが、いつの間にか行方不明となってしまったそうです。今でも五家荘にその那須与一の弓があったとしたら、鬼山御前の肖像画とあわせて、なんと運命的でロマンチックな伝説ができあがったろうにと思えば本当に残念でなりません。もし、あなたの家や五家荘に先祖代々の物があつたとしたら、もしかすると那須与一の弓のように大変価値のある物かもしれませぬ。五家荘の宝物を、みんな大切に大切に守り続けて子や孫に引き継いでいってください。